

前間本『象院題語』のハングル音注について(下)

竹越 孝

(承前)

4. ハングル音注の特徴

以下、漢語音韻史・朝鮮漢字音史の面で特に注目される点をいくつか取り上げて見ていくことにしたい。その際の比較材料として、以下の諸資料における音注の状況をそれぞれの先行研究によりつつ取り上げることとする：

- A. 『翻譯老乞大・朴通事』(1517年以前)：遠藤(1990)
- B. 『朴通事新釋諺解』(1765年)：姜信沆(1978)
- C. 『重刊老乞大諺解』(1795年以後)：遠藤(1993)
- D. 『華音啓蒙諺解』(1883年以後)：鶴殿(1985)
- E. 『華語類抄』(1883年頃)：伊藤(2002)
- F. 『你呢貴姓』(1864-1906年?)：福田(1995a; 1995b)
- G. 『華音撮要』(1877年)：更科(2005)

なお、ABCの三資料においては右側音の状況のみを問題とする。以下の引用では、[]内に篇番号を示し(1、2、3、6、12、その他の順)、漢字とハングルのローマ字転写を記す。また、同一篇内に用例が複数現れる場合はローマ字転写の後に次数を示す。なお、前稿で不鮮明・不明確あるいは対応に疑問があるとした箇所については例として扱わないこととする。

4.1. 韻母[ai]

拙稿(2005)において、[1]、[2]、[3]に対する音注とその他の篇に対する音注では筆の太さと筆勢が異なると述べたが、それは漢字音表記の違いにも反映されている。その最も典型的な例は、現代北京語で韻母[ai]を持つ蟹摂字を、aiで記述する場合と@iで記述する場合が見られることである：

- [1] 在 jai² ; [2] 在 jai²、海 hai、概 gai²、改 gai ; [3] 在 jai、齋 jai、排 pai²、纒 cai、拜 bai²、来 rei ; [6] 在 jai、待 d@i ; [12] 在 j@i、該 g@i、臺 t@i、牌 p@i²、来 rei⁴ ; [10] 改 g@i ; [13] 帶 d@i ; 牌 p@i.

「来 rei」の例を除き、aiは[1]、[2]、[3]に、@iは[12]、[10]、[13]に見られ、[6]では両者が混在している。このことは本音注に少なくとも二つの字音の層が存在することを示すものであろう。

他の資料における状況は、ABCDEがai、FGが@iであるから(「来」はABCがrei、DEFGがr@i)、aiとするものの方が相対的に古いことが窺われる。李基文(1974: 201)によれば、朝鮮語においては18世紀後半に@が消失して@i > ai

となり、その後 18 世紀末に ai の単母音化が起こったというが、上の状況から見る限り、朝鮮語における ai の単母音化が先に起こったため、中国語の二重母音 [ai] に対し @i の表記が用いられるようになったと推測される。

4.2. 尖音と団音

次に、いわゆる尖団音の問題では、尖音系列（歯頭音）に対する音注は ji- ; ci- ; si- で一貫しているものの、団音系列（牙喉音）に対しては ji-/gi- ; ci-/ki- ; si-/hi- の揺れが見られる：

見群仄母：〔1〕京 jing2、家 jia ; 〔2〕家 jia ; 〔3〕今 gin、戒 giei、矩 giui、糾 giu、錦 gin、校 giao、教 jiao、叫 jiao2 ; 〔6〕吉 gi2、教 jao、矩 giui ; 〔12〕舉 giu、教 jiao、叫 jiao ; 〔4〕極 gi ; 〔10〕間 gian、揭 gie ; 〔11〕諫 gien、給 di ; 〔18〕江 jiang.

溪群平母：〔1〕喫 ci ; 〔2〕喫 ci ; 〔3〕慶 king2、器 ci ; 〔6〕闕 kiue ; 〔12〕監 kien、去 ciui ; 〔10〕卿 king ; 〔13〕氣 ci.

曉匣母：〔2〕行 hing5、孝 hiao2、刑 hing、下 hia ; 〔3〕行 hing5、下 hia2、許 siui ; 〔6〕學 hio、効 hiao、刑 hing ; 〔12〕歇 hie2、下 hia6、行 hing2 ; 〔19〕杏 hing.

これに関して分布の偏りはなく、本音注は尖団音の合流が一部進行した段階にあると認められる。他資料の状況は、A では全面的に区別があり、BC では一部が合流、DE では全面的に合流、FG では大部分が合流、という具合に異なる。

遠藤（1993）によると、BC では見溪群母において -n 韻尾を持つ字と曉匣母の大部分が軟口蓋音を保存しているといい、また福田（1995a）、更科（2005）によると、FG では見溪群母の一部に軟口蓋音の表記が見られるという。本音注では -n 韻尾を持つ「今錦間諫監」の諸字と曉匣母の大部分が gi-/ki-/hi- で記述されており（例外は「許」）、BC の状況に最も近いと言える。

4.3. 舌頭音の口蓋化

他の資料に見られない特徴として、舌頭音の四等字に対する音注に di-/ji- ; ti-/ci- の揺れが存在することが挙げられる：

端定仄母：〔1〕的 ji4、地 ji、帝 ji ; 〔2〕悌 ji、的 ji2、殿 jien ; 〔3〕的 ji5 ; 〔6〕的 di8 ; 〔12〕的 di4、定 jing.

透定平母：〔1〕天 cien2、停 cing ; 〔2〕條 tiao ; 〔3〕天 cien3、聽 ting ; 〔6〕天 cien2、廷 cing ; 〔12〕廳 ting2 ; 〔18〕甜 tien.

上の例で興味深いのは、「的」に対する音注が〔1〕、〔2〕、〔3〕では ji（11 例）、〔6〕、〔12〕では di（12 例）というように分かれることである。また、〔2〕に「政 ding」、〔11〕に「給 di」といった音注が見られることは、本音注において実質的

に *ji-* と *di-* の区別が無かったことを示すものと言える。

こうした舌頭音の口蓋化を示す状況は他の資料には全く見られず、いずれも *di-* ; *ti-* で記述されている。姜信沆 (1987) によれば、朝鮮漢字音においては 18 世紀前半にまず舌上音が、その後 18 世紀後半に舌頭音が口蓋化を起こしたという。19 世紀後半以降の DEFG においてその状態が反映されていないのは、正書法上の原則を保持したものと推測され、本音注では口頭音が露呈したと見るべきであろう。

4.4. 舌上音・正歯音の直拗

現代北京語ではそり舌音として現れる舌上音及び正歯音に対する音注に、*i* が含まれないか (直音)、含まれるか (拗音) の揺れが見られる。以下に舌上音・正歯音の例をすべて挙げ、直音で記述されるものはアミカケで表す：

知澄仄母：〔1〕中 **jung**、鎮 **jin**；〔2〕中 **jung**、着 **jie2**；〔3〕站 **jan4**、住 **jiu4**；〔6〕住 **jiu**；〔12〕中 **jiung5**；〔4〕逐 **jiu**；〔18〕站 **jan**、鎮 **jin**。

照床仄母：〔1〕這 **jie2**、只 **jy**；〔2〕終 **jung**、朱 **jiu**、政 **jing2/ding**、這 **jie2**、只 **jy**；〔3〕齋 **jai**、這 **jie3**、者 **jie2**、整 **jing**、至 **jy2**、之 **jy2**；〔6〕這 **jie3**、紙 **jy**、順 **sun**；〔12〕狀 **jang2**、主 **jiu2**、正 **jeng**、政 **jing**、這 **jie**、者 **jie2**；〔11〕諍 **jing**。

徹澄平母：〔1〕朝 **cao**；〔3〕朝 **ciao2/cao**、重 **cung**；〔6〕朝 **cao2**；〔12〕朝 **cao**、呈 **cing2**；〔11〕呈 **cing**。

穿床平母：〔1〕醜 **ciu**；〔2〕穿 **ciuen**；〔3〕出 **ciu**、穿 **ciuen**、串 **ciuen**；〔6〕出 **ciu6**；〔12〕查 **ca**、出 **ciu2**。

審禪母：〔1〕山 **san9**、上 **siang**、尚 **siang**、常 **ciang**、城 **cing2**、是 **si3**、士 **sy**、尸 **sy**、壽 **siu2**；〔2〕山 **san**、常 **ciang**、臣 **cin**、書 **su**、身 **sin**、是 **si2**、時 **sy**、守 **siu3**；〔3〕燒 **siao2**、聖 **sing2**、聲 **sing**、是 **si5**、史 **sy**、時 **sy2**、壽 **siu2**；〔6〕成 **cing**、少 **sao**、庶 **su2**、書 **su2**、屬 **su2**、士 **sy5**、是 **si2**、使 **si**；〔12〕上 **sang6/siang2**、聲 **sing**、生 **syng**、事 **sy5**、士 **sy**、拾 **si**、說 **siue2**、受 **siu**、收 **siu**、手 **siu**；〔5〕耍 **soa**；〔11〕承 **cing**。

「中」字に対する音注が〔1〕、〔2〕では **jung** (2 例)、〔12〕では **jiung** (5 例) として分かれる。また、「朝」に対する **cao** (5 例) と **ciao** (2 例)、「上」に対する **sang** (6 例) と **siang** (3 例) などでは、同一字の音注に揺れがある。

上のうち、二等字は「齋站諍狀山生士史使事」であり、三等字はこれ以外のすべてであるから、直音表記は二等字と三等字、拗音表記は三等字 (例外は「使」) に用いられることが分かる。なお、他資料の状況はそれぞれに複雑な条件を持つため、ここでは立ち入らず後考に待つこととする。

4.5. 軽唇音

本音注で用いられる軽唇音の例は以下の通りである：

非敷奉母：〔1〕墳 vun、風 vung³、父 vu；〔2〕法 va³、凡 van、父 vu、墳 vun、風 vung；〔3〕分 fyn、坊 vang；〔6〕房 vang、飯 van、府 vu；〔12〕房 vang³、分 vyn；〔4〕服 vu；〔18〕鳳 vung.

微母：〔1〕萬 oan²；〔2〕文 un；〔3〕文 un、萬 oan⁴、武 u、舞 u；〔6〕文 un；〔12〕文 un²、務 u².

非敷奉母には v、微母にはゼロが用いられる。他資料の状況は、非敷奉母に対して ABCDE では v、FG では p であり、微母に対して A では w、BCDEFG ではゼロである。なお、〔12〕には重唇音の「簿」を vu とするものがあり、これは朝鮮語が本来的に [f] の音を持たないことによる過剰修正 (hypercorrection) の一種と考えられる。DE にも同様の現象が見られることは鵜殿 (1985)、伊藤 (2002) により指摘されている。

4.6. 日母

本音注で用いられる日母の例は以下の通りである：

〔2〕人 in、日 si、肉 riu；〔3〕如 su、兒 yr；〔6〕人 in；〔12〕入 siu、人 in；〔11〕耳@r；〔13〕入 ziu.

上の例では声母にゼロ；s-；r-；z- という四種類の表記が混在しており、かつ su/siu/ziu；yr/@r のような揺れが見られる。他資料の状況は次の通り：

	A	BC	DE	F	G
人	zin	in	in	rin	in
日	zi	zi	i	i	i
肉	zu	riu	iu	—	—
如	ziu	ziu	iu	ui	—
入	ziu	ziu	iu	—	—
兒	z@	yr	er	er	er
耳	z@	yr	er	—	—

上表によると、A ではすべて z-、BC ではゼロ；z-；r- が混在し、DEFG では F の「人 rin」を除きゼロということになる。本音注に最も近いのは BC と思われるが、s- で記すものは見られない。これが z- の無声化を物語るものか、単に s と z を書き分けないという原則によるものかは不明である。

4.7. その他

本音注に見られるその他の興味深い例としては、「筵簪 ien」に対する〔3〕の「演 rien」、「冠官關 goan」に対する〔12〕の「觀 guen」、「私寺司四伺 sy」に対

する〔2〕の「死 sa」、〔12〕の「詞 sy」などが挙げられる。「演」は朝鮮語で語頭に流音が立たないことによる過剰修正、「觀」は A などに見られる伝統的な表記、「死」及び「詞」は固有語音の反映と見るべきであろう。

また、語気助詞の「呵」に対し全篇を通じて he の音が付けられていることも注目される。「呵」は『舊本老乞大』(14 世紀) 及び『訓世評話』(1518 年) に使用例が見られるが、『翻譯老乞大・朴通事』以降の諺解本では一律に改訂されているため、これまでその音注例が知られなかったものである。

5. おわりに

前節で指摘した韻母 [ai] や「的」、「中」に対する音注の分布状況から見て、本音注に少なくとも二種類の字音の層が存在することは明らかであろう。即ち〔1〕、〔2〕、〔3〕とそれ以外の篇ということになる。ただ、相対的にどちらが保守的でありどちらが革新的であるかという点は、俄かには決めがたい。

本稿で行った検討は決して網羅的なものではなく、取り上げてしかるべき現象はまだ数多く存在すると思われるが、それらに対する考察は今後の課題としたい。

<参考文献>

- 伊藤英人 2002 「高宗代司訳院漢学書字音改正について—「華語類抄」の字音を通して—」, 『朝鮮語研究』1: 129-146.
- 鶴殿倫次 1985 「『華音啓蒙諺解』漢字音注の特質」, 『愛知県立大学外国語学部紀要』18 (言語・文学編): 153-198.
- 遠藤光暁 1990 『《翻譯老乞大・朴通事》漢字注音索引』, 『開篇』単刊3, 好文出版.
- 遠藤光暁 1993 「《重刊老乞大諺解》牙喉音字顎化的条件」, 『開篇』11: 102-109.
- 姜信沆 1978 「『朴通事新釋諺解』内 字音 yi 音系」, 『學術院論文集』17: 79-402.
- 姜信沆 1987 「韓國漢字音内 舌音系字音 yi 變化 ei dai-ha-ie」, 『東方學志』54-56; 遠藤雅裕訳「韓國漢字音の舌音系字音の変化について」, 『開篇』10: 67-87, 1992.
- 更科慎一 2005 「19 世紀末朝鮮の北方漢語資料『華音撮要』の研究—ハングル音注を中心に—」, 『アジアの歴史と文化』9: 63-103.
- 竹越孝 2005 「朝鮮司訳院の漢学書『象院題語』について」, 『汲古』48: 44-49.
- 福田和展 1995a 「《你呢貴姓》の言語に関する初歩的分析」, 『語学教育研究論叢』12: 189-207.
- 福田和展 1995b 「《你呢貴姓》翻字」, 『開篇』13: 113-134.
- 李基文 1974 『國語史概説』(改訂三版), 塔出版社; 藤本幸夫訳『韓國語の歴史』, 大修館書店, 1975.